

南シナ海での「米中対立」 両国の本音は衝突回避

南シナ海での岩礁埋め立てをめぐる、米中間で批判の応酬が続いている。日本の報道では正面衝突の構図が強調されているが、現実とずれていないか。



富坂 聡
ジャーナリスト

とみさか・さとし ●1964年生まれ。北京大学に留学後、中国報道に従事。拓殖大学教授。

南シナ海で、再び米中の緊張が高まりつつある。きっかけは米国が、中国による南シナ海での岩礁埋め立ての実状を写真で公開したことだ。また米国は中国が埋め立てを行っている岩礁から12マ内の、中国が領海と見なす海域に艦船を派遣する意思も示した。これを受け、日本メディアは米中が南シナ海で「一触即発」と騒ぎ立てている。

南シナ海の空と海で緊張が高まるのと同時に、外交面での牽制合戦も激しさを増している。米国のジョン・ケリー国務長官は5月16日から中国訪問時、南シナ海での岩礁埋め立てを話題にした。これに対し、米中関係は基本的に安定している」と両国関係のベースは揺らいでいないことを強調している。これは中国の国防関係者が頻りに口にする表現で、シャングリラ・ダイアログでも繰り返して使われた。

「米中関係は基本的に安定している」と両国関係のベースは揺らいでいないことを強調している。これは中国の国防関係者が頻りに口にする表現で、シャングリラ・ダイアログでも繰り返して使われた。

米中とも強気の裏で 歩み寄りを模索

米国が南シナ海で偵察を強化し、艦船の派遣まで公言した以上、この海域で思わぬ衝突が起きる可能性は排除できない。ただ、それを前提としても米中には、それぞれ問題を先鋭化させない調整能力が備わっていると考えられる。

たとえば、カーター長官の発言も、ハワイでは中国を名指しして埋め立ての即時中止を求める内容だったが、数日後のシャングリラ・ダイアログでは「あらゆる国」への呼びかけに修正している。

これは、南シナ海問題で中国が最も不満を募らせてきた部分である。西側が岩礁埋め立てを中国による一方的な現状変更と見なすのに対して、中国は「南シナ海で出遅れた」という意識を強く持ってきた。彼らの論理でいえば、「飛行場を造るのは（周辺国で）4番目」となり、「エネルギー開発で海底にドリルを入れるのは501番目」となる。

つまり、「なぜ中国の行動だけが非難されるのか」という主張が続けてきたのだ。

中国側は表向き、「部外者が口を出すな」と言わんばかりの対応を見せているが、米中との話し合いには応じる姿勢は明確だ。そのことは行動にも示されている。

たとえば、岩礁での灯台の建設だが、中国はこれがこの海域を航行する船の安全に寄与するとしている。また海洋調査と称して、海水の水質検査の結果をユネスコ（国連教育科学文化機関）に毎月送つてもいる。もちろん、中国のこうした行為の狙いは既成事実化の推進にある。だが、少なくとも中国と対立する米国の価値観に歩み寄ろうという姿勢があることは間違いない。中国の行動について「自由航行の妨げにはなっていない」との主張をシャングリ

め立てを話題にした。これに対し、会談相手の王毅外相は記者会見で、「わが国の主権と領土の保全を守る中国の決意は、岩のように強固で揺るぎないものだ」と反発してみせた。続いてアシントン・カーター米国防長官が5月27日にハワイで、中国が南シナ海を進める埋め立てを速やかに中止するよう中国に求めたことが伝わり、中国は再び強く反発した。論戦は5月31日から6月2日までシンガポールで開かれたアジア安全保障会議（シャングリラ・ダイアログ）にも引き継がれ、中国から派遣された人民解放軍の孫建副総参謀長が「中国の主権の範囲内の問題だ」と、中国がこれまで行ってきた主張を繰り返した。同時に「軍事防衛の必要を満たすため」と軍事目的であることを明言した。

そのことが日本ではクローズアップされているが、実は中国から発信される情報を見ると「米中対立」を強調するトーンでは決してない。むしろその逆である。ケリー国務長官の訪中時のCCTV（国営テレビ）の報道では「中米両国の理解が進んだ」、「南シナ海問題で特定の立場を取らないと（ケリー国務長官が）明言した」といったことが要点としてピックアップされているのだ。

また中国の国防白書発表に際して記者会見に臨んだ国防部報道官は、

「ラ・ダイアログでもしたことも、同じ文脈で理解できる。

衝突の回避に向けた米中の修正能力には触れないまま、日本メディアの報道では、米中対決の危惧ばかりが強調されている。はたして、本当の国際情勢を国民に伝えているといえるのだろうか。

关键词

key word

九段线

jiǔduànxiàn

九段線。中国が南シナ海の領有権を主張するために設定した9本の境界線。国際的には効力が疑問視される。